

令和４年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」に関する 成果報告書

- 1 委託事業の内容
「専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証」
- 2 事業名
「福祉・介護分野における中核的人材養成に向けた高専一貫教育プログラム開発・実証事業」
- 3 分野
福祉【介護人材】
- 4 代表機関

法 人 名	北海道栗山町
代 表 者 名	栗山町長 佐々木 学
学 校 名	栗山町立北海道介護福祉学校
所 在 地	北海道夕張郡栗山町字湯地 6 0 番地

北海道栗山町

はじめに

少子高齢社会の進展により、今後も高齢者人口のピークが続くとともに、人口減少が加速化すること見込まれている。介護人材の確保はますます困難となることが予想され、介護福祉士はもとより介護福祉士以外の介護職、さらには多様な担い手や手法で、地域住民が主体となって地域共生社会を構築する必要がある。

本町では早くから高齢社会の到来を見据え、介護の必要性を認識し、昭和62年の社会福祉士及び介護福祉法に基づく国家資格「介護福祉士」創設を契機に公立の介護福祉士養成校として北海道介護福祉学校を昭和63年に開校し、福祉のまちづくりを掲げてその充実・深化に努めてきた。

本校が掲げる教育目標に基づき、豊かな人間性や、日々進化する高度な知識・技術に対応できる人材の育成に尽力しており、これまで30年余に渡り2千2百人以上の卒業生を輩出し、道内各地の介護人材育成に寄与している。

既に本町では介護人材確保に向けた対策を協議する場として、行政（町及び教育委員会）、介護福祉学校、産業界（町内介護事業所等）が連携し、「栗山町介護人材確保連絡会議」等を設置し、課題解決に向けた議論を深めている。

これらを踏まえ、今後、本校の存在意義を発揮し、介護分野においてその中核を担う介護福祉人材を養成するため、新たな教育モデルの開発を目指したいと考え、現在、連携協定を締結している栗山高等学校との連携をより強化・発展させるとともに、行政と産業界が協働し、高・専一貫の教育フ

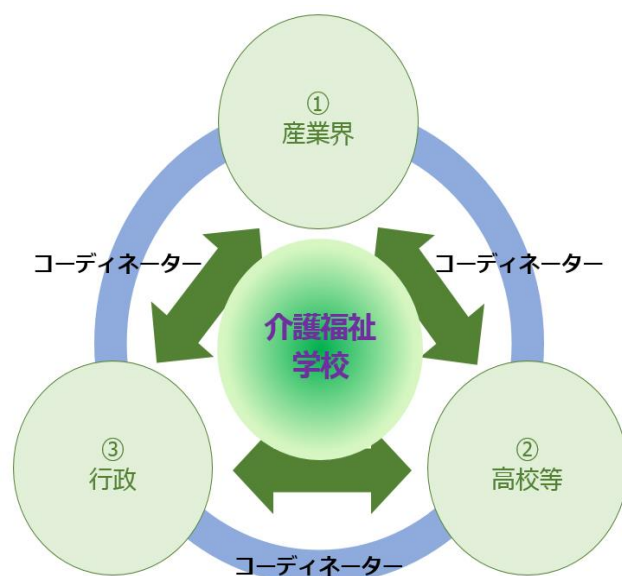


図1 魅力化コンソーシアム概念図

連携組織「魅力化コンソーシアム（図1）」を構築し、発展的な事業展開を行うとともに、専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発及び実証を目指すものとして、令和4年10月3日に本事業にかかる委託契約を締結している。

なお、参画主体・参画レベルは、各分野・地域から人的・物的協力などを得ることでプログラムの実効性や事業の効率性を高め、社会に求められる人材ニーズに基づいた教育プログラムを開発し、産業界とも連携を図り、介護人材確保に資するものとしている。

1 本町の福祉教育

本町はこれまで「福祉のまちづくり」を掲げてきた。現在、第7次総合計画が策定されているが、まちづくりの合言葉は「ふるさと栗山です。～みんなが元気なまち～」として、人がるながら元気あふれる人生100年を目指している。

本校はこれまでの間、特徴的な取組として、北海道介護福祉学校の専任教員が町内小中高の児童生徒に対して行う「福祉」の学習指導や介護福祉学校の在校生が中心となり町内の小中学校及び北海道栗山高等学校と連携し、義務教育（小学校）における総合学習、土曜授業、また中学生の上級学校訪問等に対応してきた。

栗山高等学校とは連携協定に基づき、選択科目の中で専門学校の教員を年数回派遣してきた。これら小中高等学校の12年間を「一つの学び」として捉え（図2参照）、今後、栗山に住むすべての子どもたちが地域の人々との触れ合いや体験活動を通して、互いを思いやり、助け合い、励まし合いながら、自分たちの住むこの栗山を誇りに感じ、自らがこのまちの担い手としての自覚を持つための教育を進めていく必要がある。

なお現在、本校と連携協定を締結している栗山高等学校とは連携をより強化し、発展的に事業展開を図ることが求められる。

町内の小中高と介護福祉学校の連携による一貫した福祉教育

【現状と課題】

- ・人口減少により生産年齢人口が50%を切っている。介護人材が不足することで、介護サービス提供量の問題が発生
- ・一貫した教育・啓発活動により、地域特性を生かし誰もが共生・協働する地域づくりへの取組
- ・「（啓発）発掘～育成～教育（研修）～定着」というプロセスと、他分野でも福祉・介護の視点の活用

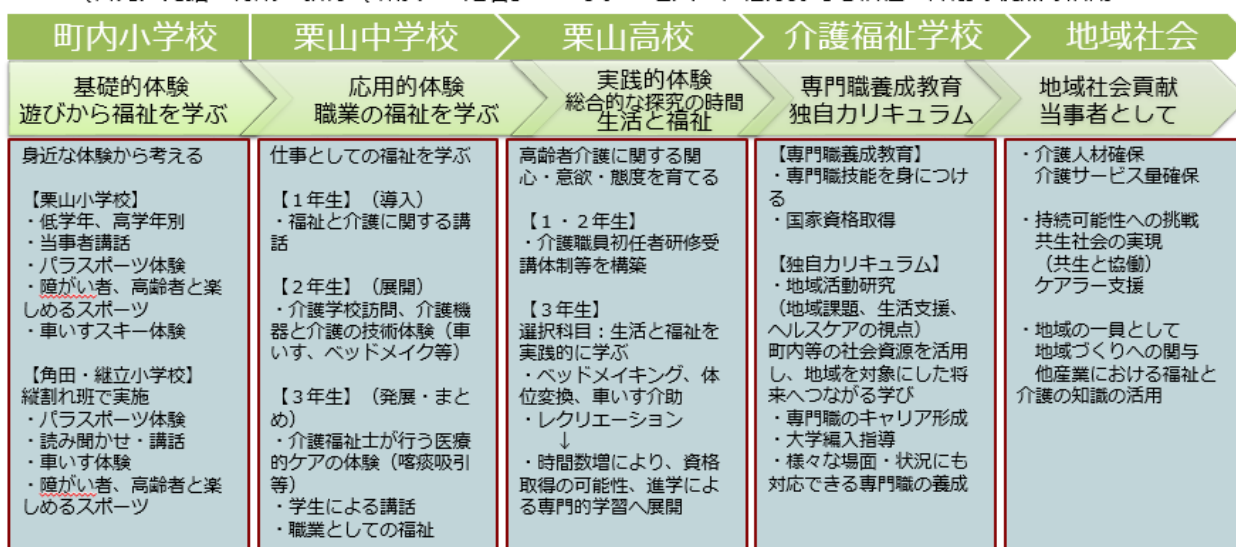


図2 本町における一貫した福祉教育のイメージ

小中高等学校の12年間を「一つの学び」として捉えてはいたが、栗山高校においては1学年および2学年においてカリキュラムに含まれず、また、3学年においても選択科目である「生活と福祉」の履修生のみとなってしまうことが課題となっていた（図3）。

この課題に加え、今後も少子高齢化と生産年齢層の減少といった人口構造が変化する社会において「福祉・介護の知識を有する人材」を養成することには意義があることから、本事業の取り組みに結びついたものである。

なお、本年度は契約締結の時期が10月になったことから、次年度の実践に向けた準備段階の取り組みが主たるものになっている。

北海道介護福祉学校と栗山高等学校との連携による福祉教育

【現状と課題】

- ・栗山高校から、毎年入学生が存在（ここ数年は、1～3人程度）
- ・栗山高校出身の学生の大半は卒業後、栗山町近郊または空知管内に就職し活躍
- ・栗山町内の福祉・介護事業所も他地域と同様、人材確保には苦慮

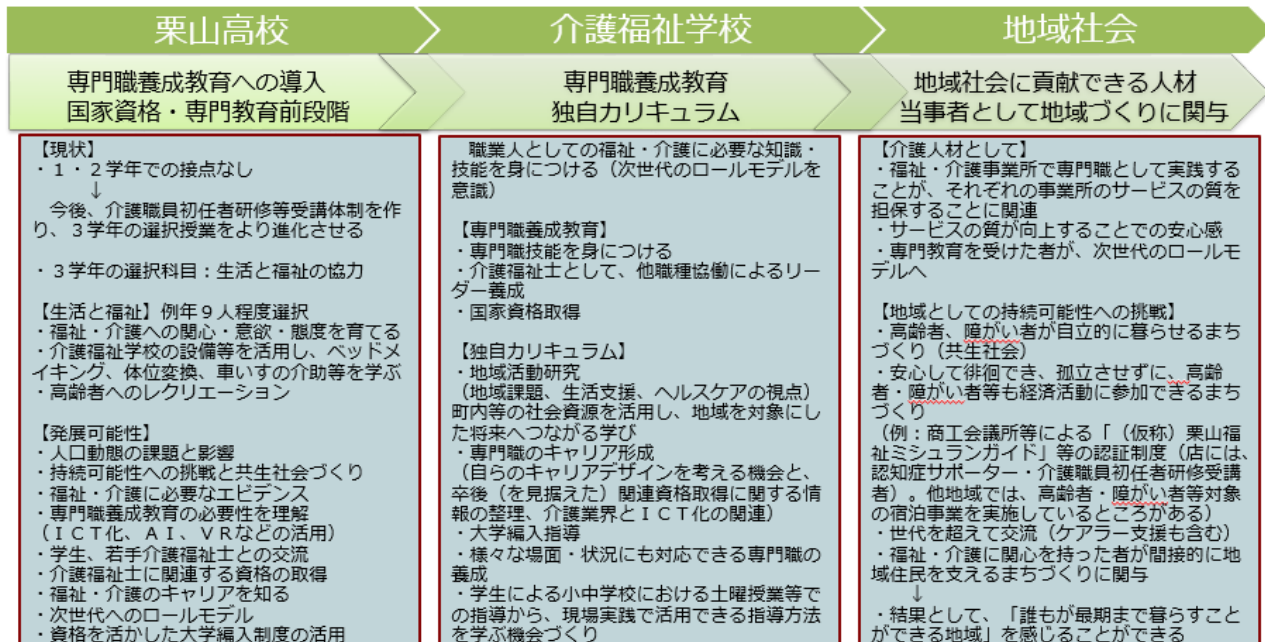


図3 栗山高校と北海道介護福祉学校のつながり

2 令和4年度の取り組み

（1）各機関との協力（主内容）・役割分担の明確化

①北海道栗山高等学校

地域ニーズを取り入れた教育研究の活性化や町内小中学校間連携の推進、高校での基礎的専門力の養成、地域における介護福祉学校の存在価値の向上を図る。

②行政機関（栗山町）

学校間の知と人材を活用した課題解決や地域内への若者の定着促進、地域の経済基盤強化と社会の維持・存続。

③北海道介護福祉学校

介護分野においてその中核を担う介護福祉人材の養成と、介護人材が定着する環境づくりを目指し、新たな教育モデルを開発。

④コーディネーター（人材、人選、役割等）

魅力化コンソーシアムの参画主体である①産業界、②高校等、③行政間のそれぞれをつなぐ産学官連携を図るコーディネーターの設置。なお、その人材に関しては、現在、北海道教育委員会と相談・連携しながら人選を進めているところであるが、令和4年度においては、栗山町教育委員会職員及び本校校長を本事業担当職員の形で設置。

(2) 教育プログラムの策定（概要）

①栗山高校のスクールポリシーの変更

高専連携プログラムを開発するにあたり、栗山高校側で「栗山町の自然や暮らし、介護・福祉に興味関心があり、地域の課題解決に主体的に取り組む生徒」と一部スクールポリシーが変更されている。

②栗山高校における総合科目「栗山と福祉」の新設

令和5年度入学生より総合科目「栗山と福祉」が新設され、必修科目として生徒全員が3年間で計105時間学習することになった。そこで、この科目を栗山高校と本校が有機的に連携・接続すべく。協働でカリキュラムを検討していくことになった。

③「栗山と福祉」のカリキュラム作成（開発したプログラム）

栗山高校と北海道介護福祉学校間で協議を行い、令和5年度から展開される「栗山と福祉」のカリキュラム作成を実施した。各学年におけるテーマは次のとおり（表1参照）。詳細のカリキュラム案は表2～4のとおり作成した。

表1 「栗山と福祉」の学年別テーマ

栗山高等学校 総合科目「栗山と福祉」の学習テーマ
【1年次の学習内容】 栗山町の高齢化の現状と福祉の歴史を学び、課題を発見する。また、さまざまな活動を通して介護や福祉についての興味・関心を養う。
【2年次の学習内容】 介護の基礎的な技術を学びながら、職業としての介護や福祉についての理解を深める。
【3年次の学習内容】 地域社会の一員として、自らにできることを考え、実践する力を身につける。

なお、「栗山と福祉」は令和5年度からの開始となるため、令和3年入学生（新3年生）および令和4年入学生（新2年生）は、これまで同様に3年時に選択科目「生活と福祉」で福祉について学ぶ。したがって、令和5年度、令和6年度は「栗山と福祉」、「生活と福祉」（令和6年度末修了）を並行して展開する。

令和7年度から選択科目は、「フードデザイン」として開始となる。この科目は食生活を総合的にデザインすることが目標であり、介護福祉士養成教育科目の一つである「生活支援技術」と関連する可能性があることから、今後、教科間連携を模索し、横断・総合的で深化する学びの内容・機会の提供について検討を加える余地を残した。

表2 「栗山と福祉」（1年）

【学習テーマ】			
栗山町の高齢化の現状と福祉の歴史を学び、課題を発見する。また、様々な活動を通して介護や福祉についての興味・関心を養う。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（3年間の流れ）・ポートフォリオ配付	
2 3	4	映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）	こんな夜更けにバナナかよ
4	4	映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）・感想記入	
5	5	出張講義：くりやまの福祉の歴史と今	介護学校
6	5	出張講義：くりやまの福祉の歴史と今	介護学校
7	5	調査：くりやまの福祉サービス	
8	5	見学）福祉施設訪問（くりのさと）	
9	5	見学）福祉施設訪問（くりのさと）	
10	5	講義：福祉・介護のICT化を知る（ロボット体験）	介護学校
11 12	6	実習）介護学校での介護実習（車いす・歩行介助）	介護学校
13 14	6	実習）車いすで町に出てみよう	介護学校
15 16	6	車いすで町に出てみよう・まとめ（グループワーク）	
17	6	車いすで町に出てみよう・まとめ（グループ発表）	
18	7	手話講座（手話ソング）	栗山手話の会
19	7	手話講座（手話ソング）	栗山手話の会
20 21	9	実習）介護学校での介護実習（視覚障がい体験）	介護学校
22 23	9	パラスポーツ体験	岩教大
24 25	9	盲導犬協会 講演	
26	9	盲導犬協会 講演・感想	
27 ～ 34	10	見学）福祉系大学・介護福祉施設 ・事前、事後指導を含む	
35	3	一年間の活動を振り返る、まとめ	

・今後、関係機関等と調整する中で変更する場合がある。

・介護学生と栗山高校生の合同授業を調整

表3 「栗山と福祉」（2年）

【学習テーマ】			
介護の基礎的な技術を学びながら、職業としての介護や福祉についての理解を深める。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（2年次の学習について）	
2 3	5	実習）介護実習（高齢者疑似体験）	介護学校
4 ～ 10	6	実習）介護実習 ・ベッドメイキング、・体位変換、・衣類着脱、食事等 ・介護実習の振り返り	介護学校
11 ～ 13	7	認知症を学ぶ ・認知症サポーター養成講座 ・感想作成	地域包括支援センター等
14 15	7	ヤングケアラーについて考える	地域包括支援センター等
16	7	認知症 VR 体験	介護学校
17	7	介護福祉学校地域活動研究報告会	介護学校
18	9	コミュニケーション方法を学ぶ	介護学校
19 ～ 21	9	実習）高齢者へのインタビュー ・事前準備 ・まとめ、報告会	
22 23	10	認知症を学ぶ ・徘徊模擬訓練 ・SOS ネットワーク	介護学校
24 25	11	手話講座 ・手話について学ぶ	栗山手話の会
26 ～ 28	11	映画で学ぶ福祉の仕事 ・「ケアニン」の鑑賞とまとめ、感想	
29 ～ 31	12	福祉・介護の仕事を知る ・介護学校教員の講話 ・若手介護職員とのトークイベント	介護学校
32 33	2	パラスポーツを体験する	
34	2	福祉・介護のキャリア形成	介護学校
35	3	一年間の活動を振り返る、まとめ	

・今後、関係機関等と調整する中で変更する場合がある。
・外部との調整に関しては、随時実施する。

表4 「栗山と福祉」（3年）

【学習テーマ】			
地域社会の一員として、自らにできることを考え、実践する力を身につける。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（3年次の学習について）	
2 3	5	手話講座 ・手話について学ぶ	栗山手話の会
4 ～ 8	9	町内高齢者へおのプレゼント制作	
9 10	10	レクリエーションを学ぶ ・レクリエーションに関する講義、演習	介護学校
11 12	10	レクリエーションを企画する	
13 ～ 15	10	認知症サポーターステップアップ講座	地域包括支援 センター等
16 ～ 18	11	レクリエーション準備	
19 20	12	中里町内会との交流会	中里町内会 社会福祉協議会
21 22	12	町内高齢者等へのプレゼント配布 ・地域での活動報告、まとめ	社会福祉協議会
23 ～ 26	12	「栗山と福祉」発表準備	
27 ～ 30	1	「栗山と福祉」発表	

・今後、関係機関等と調整する中で変更する場合がある。
・外部との調整に関しては、随時実施する。

④選択科目「生活と福祉」の内容策定（開発したプログラム）

令和5年度入学生から新科目「栗山と福祉」が必修科目とり、その移行期間中（令和6年度末）までは、選択科目「生活と福祉」を継続実施する。これについても高校側と介護学校の担当教員間で調整している。そのうち連携して実施するものとして授業を4回計画し、そのうち3回を介護学校への来校型とし、1回は高校で実施することにした。その計画は次のとおり（表5）。

表5 選択科目「生活と福祉」（3年時選択）

令和5年度予定			
回	予定月	学習内容	講師・会場等
1	令和5年6月	介護実技：ベッドメイキング	講師 介護学校 場所 介護学校
2	令和5年6月	介護実技：ベッドでの体位変換と車いすへの移乗	講師 介護学校 場所 介護学校
3	令和5年6月	介護実技：車いす体験と杖での歩行介助	講師 介護学校 場所 介護学校
4	令和5年10月	レクリエーションの基礎的・基本的知識の習得	講師 介護学校 場所 栗山高校

・実施時期に関してはほぼ確定。

（3）令和4年度の出前授業

本年度、介護福祉学校から高校生に対しての出前授業として、令和4年10月13日（木）10：45～11：35の時間帯で、高校生が地域に居住する高齢者との交流会を実施するための事前準備として、高齢者レクリエーションについての講義を栗山高校で実施した。参加者は3年時選択科目「生活と福祉」履修生徒9名（男子2名、女子7名）に対して実施した。その際に使用した資料は別紙のとおり。

（4）くりやま塾（開発したプログラム）

①授業の実施

栗山高校における令和5年度から実施の新科目「栗山と福祉」設置に伴い、本校との連携を深めるためのキックオフ事業として、令和4年12月21日に北海道栗山高等学校「第12回くりやま塾」講演会において、テーマ「これからの時代を考えてみようじゃないか」～福祉と介護の視点から～と題し、本校教員が講師、栗山高校出身の本校在学生在がファシリテーターとなり2時間の授業を実施した。この講演会には栗山高校生徒全員が参加したが、福祉と介護について考える機会のある場として興味・関心を持てるよう、座学だけではなく、体験やゲームを取り入れるなど、参加型の内容となるような工夫を凝らした。

参加者は北海道栗山高等学校（3学年生徒112名、教職員15名）、栗山町関係者（教育委員会、町内小中学校教職員、役場職員等、栗山高等学校PTA、栗山高等学校を支える会、北海道介護福祉学校（教職員、学生）等で計147名の参加がみられた。

内容は次のとおり。

講 話	「福祉と介護の話」
体験 1	「知って得するからだの動き」 ※北海道介護福祉学校学生 4 名（栗山高校卒業生を中心に）がデモンストレーションを行う。
体験 2	「パラスポーツすごろく」 ※北海道介護福祉学校学生 4 名グループを巡回してサポート。
まとめ	「福祉と介護のみらい」 ※終了後、各クラスにパラスポーツすごろくをプレゼント

②くりやま塾のアンケート調査

くりやま塾終了後、高校側の協力により参加生徒に対してアンケート調査を実施した。内容は次のとおり。

名称	「第 1 2 回くりやま塾」講演会アンケート調査
目的	講演を受講しての理解度を図るとともに、福祉や介護に対する興味・関心度を考察し、今後の高専一貫プログラム開発・実証事業に反映することを目的とする。
対象	講演会に参加した栗山高校生徒全員
手 法	講演会終了後、その場でアンケート調査書を配付、提出
項 目	○設問（以下の 6 項目により理解度を 4 段階で回答） ・栗山町や介護学校の介護・福祉教育について理解ができた。 ・自分の将来（進路）について考えるきっかけになったと思った。 福祉や介護事業だけでなく、様々な仕事について、知りたいと思うようになった。 ・パラスポーツの理解が深まり、自分の夢や目標を考えるきっかけになったと思った。 ・自分も他人も区別することなく、人を大切にする事が重要だと思った。 ・自分の「ふるさと」を大切にしていきたいと思った。 ○その他自由記述
結 果	自由記述 【1 年生】 ・色々な人と関われる良い機会だった。 【2 年生】 ・パラスポーツすごろくが面白かった。 ・今まであまり知らなかった、パラスポーツをすごろくとして、ゲームで楽しめるのはとても良いと思いました。 ・介護について今までより良く知ることができた。

	・正しい座り方や立ち方を学ぶことができたので良かったです。 【３年生】 ・パラスポーツすごろくが楽しかった。（３人） ・とても聞きやすく、体験も楽しかった。 ・既に進路が決まっているため、進路については考えなかったが、介護が必要になった時のことを考えるきっかけになった。 ・とても分かりやすかった。
--	--

③質問紙の集計結果

(A:そう思う B:どちらかというと思う C:どちらかというと思わない D:そう思わない)

※ 平均点は、A=4点、B=3点、C=2点、D=1点 として算出)

項 目			A	B	C	D	平均	回答数
1	栗山町や介護学校の介護・福祉教育について理解ができた。	1年	15	9	0	0	3.6	24
		2年	29	4	0	0	3.9	33
		3年	22	16	4	0	3.4	42
		合計	66	29	4	0	3.6	99
2	自分の将来(進路)について考えるきっかけになったと思った。	1年	6	11	6	1	2.9	24
		2年	18	12	3	0	3.5	33
		3年	14	18	4	6	3.0	42
		合計	38	41	13	7	3.1	99
3	福祉や介護事業だけでなく、様々な仕事について、知りたいと思うようになった。	1年	9	9	4	2	3.0	24
		2年	18	13	2	0	3.5	33
		3年	15	16	8	3	3.0	42
		合計	42	38	14	5	3.2	99
4	パラスポーツの理解が深まり、自分の夢や目標を考えるきっかけになったと思った。	1年	14	9	0	1	3.5	24
		2年	19	13	1	0	3.5	33
		3年	24	14	4	0	3.5	42
		合計	57	36	5	1	3.5	99
5	自分も他人も区別することなく、人を大切にする事が重要だと思った。	1年	8	11	3	2	3.0	24
		2年	26	6	1	0	3.8	33
		3年	23	15	2	2	3.4	42
		合計	57	32	6	4	3.4	99
6	自分の「ふるさと」を大切にしていきたいと思った。	1年	12	9	1	2	3.3	24
		2年	22	10	1	0	3.6	33
		3年	21	14	2	5	3.2	42
		合計	55	33	4	7	3.4	99

④くりやま塾に関する評価

この講演会には、栗山高校生全員が参加したが、福祉と介護について考える機会の場として興味・関心を持ってもらえるよう、座学だけではなく、体験やゲームを取り入れるなど、参加型の内容となるような工夫を凝らした。

講演会終了後、参加した高校生へのアンケート調査を実施したが、実施した側で意識していた意図を理解していただいたと感じ得る回答内容が多くあった。

介護福祉学生と栗山高校生の交流する機会となったことは、本校が実施している独自科目「地域活動研究」および「キャリア形成支援講座」への栗山高校生の授業参加を実現する足がかりとなり、大変大きな成果が出たものと感じている。

次年度以降、事業実施に当たっては、本校教職員と事業実施体制イメージの魅力化コンソーシアムにある行政及び産業界の協力を得て、授業や実習をより実践的に展開する。特に、介護技術等の演習時は、養成校で学ぶ学生が演習授業のファシリテーターとして参加し、受講する高校生に対するロールモデルとして接点を作ることを目指す必要がある。

また、本プログラムを受講した高校生が介護職員初任者研修受講等に結び付けるスキームなどの検討をする必要性がある等が課題として明確になった。

3 関係部署等との協議経過等

本事業受託後、関係部署等との協議を実施したがその主たる経過については次のとおり。なお、学内で準備、調整したものについては含んでいない。

年月日	主 内 容
令和4年10月13日（木）	【高校での授業】専任教員派遣 高齢者のレクリエーション
令和4年10月21日（金）	【くりやま塾について】高校教頭と協議
令和4年11月4日（金）	【くりやま塾について】高校教頭と協議 ・文科省関係者との意見交換対応について
令和4年11月11日（金）	【パラスポーツについて】高校体育担当教員 ・高校生、介護学生合同による障害者スポーツ体験実施の可能性について情報交換
令和4年12月5日（月）	【くりやま塾について】高校教頭と協議 ・くりやま塾の内容・実施方法について確認
令和4年12月14日（水）	【くりやま塾について】 高校校長と意見交換
令和4年12月16日（金）	【会議人材確保連絡会議】 ・介護人材確保連絡会議で情報交換
令和4年12月21日（水）	【くりやま塾】実施
令和4年12月22日（木）	【高専連携事業について】 栗山高校との打合せ、北海道新聞取材

令和5年2月13日（月）	【高専連携事業】高校家庭科教員、本校介護系教員 ・双方で使用可能な介護に関連する授業に使用できる備品等の確認と意見交換
令和5年2月22日（火）	【高専連携事業】 ・次年度の取り組みについて意見交換
令和5年2月24日（木）	【高専連携事業】 ・次年度の連携内容、実施時期等について栗山高校教科担当者と本校介護系教員の打合せ ・年間計画への反映、選択科目「生活と福祉」の対応について

4 本事業の取り組みの課題

本年度は、実際に実施した授業等としては、選択授業「生活と福祉」に関連する高齢者のレクリエーションと、本事業のキックオフイベントとして実施した「くりやま塾」の二つである。その他、情報交換等を実施する中で幾つかの課題が浮き彫りになり、次年度以降は計画に基づきながら実施する過程において内容確認と整理が必要となった。それらを分類すると次のように区分することができる。

なお、本町及び本校は「介護人材確保に関する自治体包括連携協定」を北海道内で進めている（現在、7自治体と協定締結）。それらに関しても、本事業の活用の可能性を探る必要があることから、高専一貫による垂直的展開のある有機的連携による教育に加え、まずは段階的に「自治体包括連携協定」先にこの取り組みに関する情報発信を行うといった、水平展開も行うことが必要と考えている。

（1）事業の内容と実施に関して

- ・高校と事業の目的・内容等に関する確認・調整が随時必要
- ・地域の実態把握と、課題解決方法 に関する 学習についての検討
- ・専門職の給与条件、キャリアアップ等に関する高校教員等との情報共有
- ・課題の共有。特に令和5・6年度は「栗山と福祉」と、高校3年生の選択科目「生活と福祉」の並行展開
- ・小中高専の連携による、一貫した福祉教育との連動

（2）高校生・介護学生がともに感じるワクワク感

- ・高校生、介護学生との合同授業
- ・専門職のキャリアアップ方法、就労状況等に関する学び
- ・福祉・介護専門職（若手）も交えた演習機会の創出
- ・介護学生や若手専門職をロールモデルに
- ・介護職員初任者研修や、国家資格取得への動機づけ

（3）垂直展開と水平展開に向けた整理

- ・自治体包括連携協定等を軸にした水平展開
- ・北海道教育委員会からの協力・助言
- ・高等学校家庭科教員（部会）への情報提供等
- ・編入可能大学等との連携など

5 まとめ

令和4年度は事業取組の初年度であり、開発した高専一貫プログラムの実施は令和5年度からとなるため検証には至っていないが、次年度以降、「実施・検証→修正→企画調整→実施・修正」といったPDCAを意識した取組を行うこととしたい。

幾つか具体例をあげれば、開発するプログラムの効果検証として、栗山高等学校において、令和5年度から開設する学校設定科目「栗山と福祉」の取組の成果を把握するため、1・2年次にそれぞれ、福祉・介護に対する意識調査を実施し、学習による経年変化を調査するとともに、3年次では総合的な評価を行う。

一方、本校2年次において独自科目「地域活動研究」を実施しているが、これは栗山町をフィールドとした社会資源の活用も含めた教育活動であることから、「地域の中核的人材育成」として関連付けを模索することも課題として残されている。

また、介護人材という視点からは介護事業所、介護福祉サービス利用者、関連産業等に対するアンケート調査等によるデータを集約、分析することで「地域（栗山町）において、期待され、必要とされる「将来の地域福祉を担う中核的介護人材像とその育成」の方向が見える可能性がある。そのことから、中核的人材として求められる人材像を明確にしつつ、開発するプログラムへの関り方や時期、内容等について確立を図ることが必要となる。

高齢者のレクリエーション資料

くりやま塾資料

広報くりやま掲載資料

< 成果報告書 >

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、北海道栗山町が実施した令和4年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。